

名古屋の古道・街道

池田 誠一

【13】 飯田街道…阿由知通から音聞山へ

1 信州飯田街道

名古屋から東に行く街道のいくつかに、昔「信州飯田街道」と呼ばれた道があります。水野街道(瀬戸街道)、高針街道、岡崎街道(飯田街道)等、途中で分かれるものもありますが、一部では信州飯田街道とも呼ばれていました。

名古屋から信州への道は大きく分ければ中央アルプスの西を通る木曾路(中山道)と、東を通る伊那路になります。(図1) 東の道は信州南部の交通の拠点、飯田に向かうために信州飯田街道と呼ばれたのでしょうか。これまでも書いてきましたが、昔の道の名前は一般にその地点からの方向を示すものでした。このため飯田に向かう道はみな飯田街道でもあったのです。

名古屋から平針を通過して東に向かう道はすでに中世にはあったといわれています。その道を利用して家康は岡崎と名古屋を最短に結ぶ戦略上の道を作り、岡崎街道と呼ばれました。それが戦争の危険性がなくなり交換経済が盛んになるとともに、名古屋と信州を結ぶ伊那街道としての役割が大きくなったと考えられます。

名古屋から平針を通過して飯田に向かう

道が、一般に飯田街道と呼ばれるようになったのは明治時代のようなのです。明治9年、平針から飯田への道が三等県道「飯田街道」に指定され、それが伝馬町までを指すようになってからでしょうか。今日では飯田街道といえば平針を通るこの街道になりました。

2 海と山をつなぐ道…飯田街道

(1) 物の道

名古屋から信州への道にはまず中山道があり



図1 信州への2つのルート

ます。善光寺街道を通過して中山道へ出て木曾路を進むのが距離も短く宿場もしっかりしていたため、多くの人に利用されました。

しかし信州に向かう道は、塩を始めとする海と山の物資の交換、物の流れも重要でした。幕府などの管理する道には、伝馬制度のため宿場毎の荷の積み替えや運賃が割高なことなどの難点がありました。また伊勢湾の塩の信州への中継地が足助だったこともあり、物の多くは伊那側に流れることになりました。飯田街道は海と山との物資の交換に大きな役割を担った道でした。

(2) 飯田街道

この街道は、江戸時代は岡崎街道というよりも城下の出口、駿河町の名から駿河海道とか駿河町街道と呼ばれることが多かったようです。

道は城下の中心伝馬町を出て東に向かい駿河町で南東に向きを変え、後はほぼ一直線に八事を通して平針宿に行きます。宿場の東で岡崎街道と別れ左に市外に出ます。赤池で右に拳母街道を分け、三峰峠を越え伊保を通り足助に出ます。足助からは山道になり、伊勢神峠を越えて稲橋に。後は根羽で北まわりの道と合流して飯田に出ました。

3 阿由知通から音間山へ

さて、市内の飯田街道を歩いてみましょう。



飯田街道

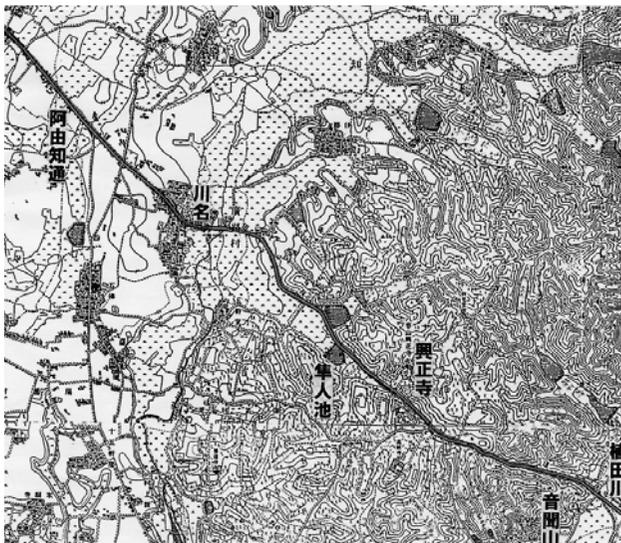


図2 阿由知通から音間山(明治24年)



石仏街道との分岐点の地藏堂

都心部には道は残っていますが戦災で大きく変わっていますので、阿由知通にある地下鉄の吹上駅から東に向かうことにします。(図2)

吹上駅の3番出口を出たすぐ後の道が旧道の飯田街道です。道路を跨いで大きく「飯田街道」と看板が出ています。その下を通過して街道を進むと300mほどで右に地藏堂があります。塩付街道に連絡する近道、石仏街道との分岐点です。地藏の横に「左 八事」「右 東海道/新四国道」と彫られています。そこから200mほどで塩付街道と交差します。信号と信号の間の2mほどの見過ごしそうな細い道です。この道についてはまた別の回に紹介したいと思います。

道は川名に向かいます。この辺りは昔は松並木がありました。家並みができ、馬車鉄道が走るようになって並木は切られてしまいました。しかし次に馬車から軌道が変わるとき、軌道のルートは北側に離れて設けられ、そこが今の幹

線道路になったためにこの旧道が残りました。

川名で、街道が左に曲がる所に川原神社があります。900年代の延喜式に名のある古い神社で、入口にある弁天が信仰を集めています。この東には戦国時代には川名北城があったとされ、また少し南の昭和警察署の西には南城もあったといひます。街道は山崎川を渡ります。



式内社の川原神社

*

東に信号を越えると公園予定地の中を進み新道に合流します。新道を少し行って杵中の手前で斜め左の道に入ります。元市電の通っていた旧道で、左に丘が迫ってきます。その旧道が再



成瀬氏のつくった隼人池

図3 壇溪の図(尾張名所図絵)



興正寺五重塔(重文)

び新道に合流する少し先に隼人池が見えます。

隼人池は、この西1^{km}ほどの藤成新田を開発しこの池を作った、藩の村家老成瀬隼人正の名を取ったものです。ちなみに[藤成]も彼が藤原氏の成瀬だったことによります。新田への水路が山崎川を渡る所が景勝地の壇溪でした。(図3)

隼人池を過ぎて信号のある道の右手が半僧坊道で、300^m程で新福寺があります。ここにも笠寺とともに宮本武蔵の石碑があります。信号交差点の左は誓願寺です。このあたりには最近まで一里塚が残っていました。

広い道を少し行くと左は興正寺です。1688年に開基を空海(興正菩薩)として開かれた寺で、尾張高野ともいわれます。総門を入ると県内唯一の五重の塔が見えます。その奥で見逃しそうなのが本堂の赤い提灯に隠れている7代藩主の宗春の筆になる「八事山」の額です。宗春は蟄居が緩和されると何度かここを訪れ心を癒したといひます。寺域は人でにぎわう西山と静けさの残る東山にわかれ、東山の頂上呑海峰には2代藩主光友が作った大きな大日如来があります。街道の向かい側は八勝館です。

*

八事の交差点の東側、正面の少し細い道が旧道です。交差点から南西に少し離れて五社宮と高照寺があります。元は共に犬山にあった式内社の稲木神社で、神社から寺になり、江戸中期



七代藩主宗春筆の「八事山」

ここに移されたといえます。

八事交差点から旧道を東に上ると両側は戦前の区画整理で出来た高級住宅地で、しばらく行くと峠になります。街道は急な坂を下って新道に出て、後はまっすぐに植田川に行きます。

その下り始めを右に、塩釜神社の道標に従って緩やかなカーブをたどると、御幸山中学の南に公園があります。この辺りは音聞山と呼ばれ、昔は「絶景は言葉に尽くしがたし」と言われ、古歌にも多く歌われた有名な歌枕でした。今は変わり果てていますが、それでも近くのマンションと木々の隙間から港を見渡すことが出来ます。東側に下ると安産で有名な塩釜神社です。

4 海の幸と山の幸

飯田街道の意味を知る上で、ひとつのデータがあります。江戸中期の1763年、名古屋・松本



八事の東の旧道



音聞山付近から名古屋港を望む

間の1年間の物流(荷駄数)を調べたもので、

名古屋→松本7,318 内 中山道1,863/伊奈路5,455

松本→名古屋7,705 内 中山道1,105/伊奈路6,600

----- (小出安治「名古屋の商圈」1958→文献②) -----

と、松本と名古屋の間でも伊那ルートが8割を占めています。信州南部との量も加えると、伊那路は大きな物流街道だったことが分ります。

名古屋から送られるものには、塩のほか、綿・綿織物、塩干魚、茶、日常雑貨など様々な物がありました。松本から来るものは米穀類をはじめ、葉煙草、生地椀、生糸、麻、酒などでした。まさに海の幸と山の幸とが交換される場だったのです。

物の流れというものは、地味ですが着々と続けられました。歴史に残る政治の道に対して、物の道は経済の道として生活を支えていました。江戸時代も後半になると目的地に直行する「中馬」というシステムが公認され、飯田街道は中馬の街道になりました。

信州飯田街道といわれた道は明治40年代に中央西線が開通するまで、長く海と山との交流の道でした。中でもこの飯田街道は、その名を通して、昔の余韻を多く残している道です。

初もうで 旧き道にも 人の声

〈主な参考文献〉

①水野時二監修「昭和区誌」(1987, 名古屋市昭和区役所他)

②芥子川律治「家康が作った革新名古屋」(1977, 地産出版)

③浅井金松「天白区の歴史」(1983, 愛知郷土資料刊行会)